四之宮・真土地区

❶ 四之宮の渡し　MAP I-4

江戸時代、幕府は相模川の架橋を禁止し、相模川の渡河は、幕府が定める馬入や田村の渡しによって行われていました。相模川の対岸に飛び地を持つ村々は、飛び地に開けた農地を耕作するため独自に渡し場を設けており、四之宮の渡しもこうした渡し場の一つでした。実際の渡し場の位置は、川の流れの変動に応じて目久尻川合流点付近から前鳥神社付近の間でたびたび移動していました。

江戸時代のはじめ、徳川家康が江戸と中原御殿を往来したとき、四之宮の渡しも利用していたようで、そのときの話が「四之宮の逆さ舟」「箸立の森」などの言い伝えとして残っています。

❷ 四之宮人形師匠墓所　MAP I-5

江戸時代中期、庶民の娯楽として浄瑠璃と人形芝居が流行し、相模川流域にも多くの芝居の座がありました。四之宮にも四之宮人形あるいは四之宮人形連中と呼ばれる座が結成され、前鳥神社の奉納行事として芝居を行いました。昭和初期には活動が中断しましたが、昭和 32 年(1957)に新たに「前鳥座」の名を冠して、活動が再開されました。

四之宮人形芝居の発展では、吉田朝右衛門が大きな功績を残しました。彼は、安政 3 年頃(1856 頃)に師匠として四之宮に迎えられ、明治 16 年(1883)3 月に 89 歳で没するまで、四之宮をはじめ相模川流域の各地で、弟子の指導を行いました。

また、ほかに吉田三十郎・ワカ夫婦も四之宮に定住し、師匠として人形の遣い方を指導する傍ら、人形のカシラの修理なども行い、四之宮人形芝居の伝承のために尽力した人物として称えられています。大念寺には、吉田朝右衛門の墓石とともに、吉田三十郎・ワカ夫婦の墓石も並んで建てられています。

❸ 湘南新道関連遺跡　MAP I-5

湘南新道関連遺跡は、平成 12 年(2000)～ 17 年(2005)にかけて発掘調査が行われました。遺跡名は、坪ノ内遺跡・大会原遺跡・六ノ域遺跡の 3 つの遺跡の総称です。

発掘調査の結果、坪ノ内遺跡と六ノ域遺跡から、奈良時代の廂付大型掘立柱建物が、東西に 86m の距離をおいて並列して発見されました。建物の外側には塀が廻ることなどから、この大型建物は相模国庁の脇殿と考えられます。これまで国庁の所在については諸説がありましたが、この発見によって、四之宮の地が奈良時代における相模国の中心地であったことがわかりました。

発見された大型掘立柱建物の一部は道路の下に保存されています。また、建物の場所については歩道上に舗装の色を変えて表示してあります。

❹ 東光寺有章館跡　MAP I-5

東光寺は田村の妙楽寺の末寺で、欣向和尚(慶長 10 年(1605)没)によってこの地に開山されたと伝えられています。東光寺には寺子屋が開かれ、この地域の庶民教育の先駆けとなりました。

こうした背景から、明治 6 年(1873)この東光寺内に有章館が創設され、近代学校教育が始められました。有章館はその後、四之宮村大会原に移転して四之宮小学校と改称し、さらに明治 42 年(1909)に現在大野小学校のある東真土二丁目に移転して尋常高等第一大野小学校となりました。

❺ 高林寺の大日如来坐像 県　MAP I-5

この坐像は『新編相模國風土記稿』四之宮村、鏡智院の条に「本尊大日。長三尺五寸」と記されている像で、明治初年の廃仏毀釈により鏡智院が廃寺となり、近くの大会寺に他の諸像と共に客仏として安置され、現在高林寺の本尊となっています。

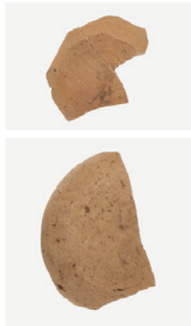
本像の頭部内に、康永 3 年(1344)の修理墨書銘があり、造立年代はこれよりさかのぼると思われますので、鎌倉後期の作と推定されます。

❻ 江戸ケ崎供養塔　MAP I-5

江戸時代後期、無敵とうたわれた雷電為右衛門に最後の黒星を与えたのが、四之宮村出身の江戸ケ崎源弥です。江戸ケ崎は天明元年(1781)平野家に生まれました。寛政 7 年(1795)3 月に「大隈」のしこ名で初土俵を踏み、後に「荒馬」と改名しました。同 10 年 10 月に入幕し、文化元年(1804)3 月には関脇に昇進しました。この間に久留米藩有馬家のお抱え力士になり、同 7 年 2 月には、しこ名を「江戸ケ崎」に改めました。

幕内に二十四場所在位し、124 勝 37 敗という好成績を残した江戸ケ崎でしたが、文化 9 年(1812)7 月、京都へのぼる道中、現役のまま 32 歳で亡くなりました。この供養塔は没後 35 年目にあたる弘化 4 年(1847)9 月に四之宮村で追善相撲が興行された際、建立されたものです。

❼ 稲荷前Ａ遺跡第 1 地点 1 号竪穴住居址出土資料 市　MAP I-5



稲荷前Ａ遺跡は平塚市四之宮から東八幡の砂州・砂丘域に立地する遺跡です。本資料が出土した第 1 地点は、平成元年 4 月に発掘調査されました。

資料は、奈良時代後半の 1 号竪穴住居址から出土したもので、土師器、須恵器、灰釉陶器、黒色土器、瓦、鉄製品、石が含まれます。なかでも土師器と須恵器に「国厨」と墨書されたものを複数含む点が注目されます。

「厨」を記した土器は、官衙内の諸施設に対し食膳の準備、食料の調達・管理等を担当する厨・厨家の備品であることを示したものと考えられ、周辺に厨家が存在したこと、ひいては厨家を含む官衙施設が存在したことを裏付けるもので、そこに国府があったという根拠となり得るものです。

奈良時代において、相模国の国府が四之宮周辺に置かれていたという学説を裏付けることとなったこの墨書土器は、平塚の古代史を語る上で欠くことができない資料の一つです。

大神・田村地区

❶ 妙楽寺の木造閻魔王坐像 市　MAP J-3

『新編相模国風土記稿』には妙楽寺の閻魔堂が村内にあったとみえ、現在妙楽寺山門上にある閻魔坐像はこの本尊とみられます。

本像は頭部が大きく作られ、眉眼をつり上げ怒号するかなり誇張した表現につくられています。体部は量感があり迫力充分ですが、頭部に比し穏やかにまとめられています。室町時代の像にみる量感に富む体形と、近世期のやや誇張の勝った面貌表現を合わせ持つ作風とみることが出来ます。閻魔王像の基準作例として、本市のみならず県内においても希少な存在といえます。

❷ 田村の渡し場　MAP J-3

田村の渡しは、中原街道と大山道の 2 つの往還の渡しでした。中原街道は中原村と江戸を結んだ脇往還で、大山道は藤沢・江ノ島からの大山参詣のために使われた道です。渡し場のある田村は、この両往還と平塚から厚木へ向かう八王子道が交差する所で、旅籠屋などもあり「田村の宿」とも呼ばれていました。渡船場の業務は、田村と対岸の一之宮村・田端村(寒川町)の 3 か村が勤めていました。また、渡し場付近は、大山・箱根・富士山を眺望することができる景勝地としても知られていました。

❸ 田村用水と六兵衛土手　MAP I-2

田村けやき公園の東側を流れる暗渠排水は、かつて田村用水(田村堀)と呼ばれていました。小鮎川から水を引き、江戸時代には岡田村・戸田村(厚木市)と大神村・田村(横内も含む)の 4 か村で利用されていました。江戸時代前期にはすでに開削されており、江戸時代を通じてさまざまな水争いが起きています。

また、公園の北側から北野橋まで伸びる土手を六兵衛土手と呼んでいます。この土手は、玉川が氾濫したときのために築かれた土手で、大神村と田村の境界でもありました。徳川家康に許可を得て築いた土手と伝えられ、土手の近くに六兵衛という人が住んでいたので、その名がついたといわれています。